

黒田大明神原

第一次発掘調査報告書

1985. 3

長野県下伊那郡上郷町教育委員会

黒田大明神原

第一次発掘調査報告書

1985.3

長野県下伊那郡上郷町教育委員会



大明神原遺跡全景 — 西より



大明神原遺跡1次遺構群 — 西より



大明神原台地南縁部出土土偶

序

大明神地籍は、かつては養蚕の最盛期には大桑園地帯であったが、42年頃第一次農業構造改善事業により、一斉に桃が植えられ、桃団地に姿を変え生産を上げて来ましたが、樹木の老化と、諸般の情勢の変化に対応するために、長期的展望に立って考える時、農業経営を有利に進展させるには、道路網の整備と区画の整理を行なうことが急務であり、併せて果樹品種の更新と集団化による諸作業の能率を上げ生産性の向上を図るべきであると、昭和56年秋、耕作関係者一同の賛成を得て、基本計画を作成して、昭和58年度から土地改良総合整備事業を実施することになりました。

この大明神地籍は、町内では最大の遺跡であり、飯沼諏訪神社とも大きな係りのある社宮司もあり多くの史跡を秘めた地籍であります。58年度は、遺跡から外れた地域の道路改良工事のため、教育委員会で立合いを願い工事を進めてまいりましたが、59年度は遺跡地域内に入って来ましたので、関係部分の発掘調査を実施していただきました。

事業費の関係で今回は関係する部分全ての調査をお願いすることが出来なかったが、はじめての発掘調査であり、今後の調査の結果を総合考察する中で古代が偲ばれるのではないかと思います。

今回の調査は、調査団長、佐藤甞信先生が担当されましたが、公私共に多忙な中で綿密な調査をしていただき、この報告書の刊行が出来ますことは、先生の御尽力の賜と深甚の感謝を申し上げ序文といたします。

昭和60年3月

上郷町長 山田隆士

例 言

1. 本書は昭和59年度長野県下伊那郡上郷町黒田大明神原地籍農業改良整備事業に伴う第一次発掘調査報告書であり、また、かつて台地南縁部出土の遺物報告を記載するものである。
2. 本次調査は道路拡幅のため幅1～2mの限られた範囲であり、遺構の大半は一部調査に終わっており、また、調査終了後他遺跡の発掘調査が3月下旬まで続き、時間的制約のため十分な研究がなされず、資料提供に重点をおいて編集した。
3. 本書の編集・執筆が佐藤が、遺構実測図は佐藤・牧内が、遺物の作図は佐藤、製図は田口が分担し、写真は佐藤が担当した。
4. 遺構実測図のうちピット内、または横に記してある数字は床面からの深さをcmであらわし縮尺は図示してある。
5. 遺物は上郷町歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

挿 図 目 次

序	3	図1	大明神原遺跡地形・位置図、及び周辺主要遺跡図	6
例 言	4	図2	大明神原地形詳図、及び発掘区域、土偶出土位置 (1:5000)	8
目 次	4	図3	大明神原遺跡遺構分布図	9
挿図目次	4	図4	大明神原1号住居址	10
I 環 境	5	図5	大明神原 “ 出土遺物	10
1. 自然的環境	5	図6	大明神原2号住居址	10
2. 歴史的環境	5	図7	大明神原3号 “ ・4号住居址	12
II 発掘調査経過	7	図8	大明神原5号 “	12
III 発掘調査結果	10	図9	大明神原2号住・3号住・4号住・6号住居址出土遺 物(1:3)	13
1. 住居址	10	図10	大明神原6号・7号住居址	14
2. 柱列址	14	図11	大明神原柱列址1号	15
3. 土 壙	14	図12	大明神原土壙1号	15
4. 石器一覧表(表1)	16	図13	大明神原 “ 2号・3号	15
IV 大明神原台地南縁部出土遺物	18	図14	大明神原 “ 4号・5号	15
1. 土 偶	18	図15	大明神原7号住居址・土壙1号・2号・3号・5号、 柱列址1号出土遺物(1:3)	17
2. 土器・石器	20	図16	大明神原台地南縁部出土土偶(1:3)	18
まとめ	21	図17	大明神原 “ 遺物(1:3)	19
図 版				
調査組織				
おわりに				

I 環 境

1. 自然的環境

大明神原遺跡は長野県下伊那郡上郷町下黒田北大明神原に所在する。上郷町は、長野県の南端を南北に並走する赤石山脈と木曾山脈の間にある飯田盆地のほぼ中央に位置する。この地域は天竜川とその支流によって形成された河岸段丘と木曾山脈の山麓に発達した扇状地上に往古から人々の生活の跡がみられる。

大明神原は南に松川の支流野底川、北に土曾川との間の山麓に発達した広大な扇状地の東端部にあり、東西 700 m、南北 100～150 m、標高 539～549 mの舌状台地に遺跡は立地している。

遺跡の北東は土曾川と、その支流栃ヶ洞川の深い浸蝕崖に切れ、谷を隔てて飯田市座光寺原となる。北から西には県道飯島飯田線と中央自動車道が並走し、さらに西には上黒田の扇状地形が広がり山麓に達している。南から東は緩い傾斜をもって下がり、洪積低位段丘面となり、飯田市街地・上郷町中心街が広がり、比高差40～50mの段丘崖をもって沖積段丘面となり、天竜川に至っている。遺跡と天竜川との比高差は150～160 mである。

微地形をみると台地の中央部北東で土曾川に、その支流栃ヶ洞川が合流している。その合流地点から西に小さな支流の谷頭浸蝕が西に進み、その浸蝕谷が終る地点から北西に凹地が長く延びている。道路改修工事中の立合調査の観察によれば、そこは砂礫の堆積層で埋まり、栃ヶ洞川の旧流路とみられる。

この旧流路とみる凹地に面す西側の舌状台地縁部と、台地南縁部一ここよりはかつて壁土採集の際、縄文中期後半Ⅰ・Ⅱ期の土偶1体と土器片・石器の多く、須恵器杯（平安期）等が出土をみており、この台地南縁に中心をおいて遺跡が展開されているとみられる。

2. 歴史的環境

大明神原遺跡は古くは鳥居竜蔵博士の「下伊那の先史及び原始時代図版—大正13年」には遺跡としてのり、図版に縄文・弥生時代の遺物が掲載されている。信濃考古総覧（昭.30）には、縄文時代前期下島式・中期勝坂式・加曾利E式・後期堀之内式、弥生時代後期、古墳時代の遺物の出土が記載されており宅地造成時出土した縄文中期後半の土器・石器・土偶の好資料があり、注目されている遺跡である。

大明神原遺跡の所在する上郷町の遺跡を概観すると、昭和46年飯田高校考古学研究会により、町内全域の分布調査がなされ、さらに昭和57年度上郷町教育委員会による詳細な分布調査によって、一般遺跡69、古墳32基、城跡3の計104遺跡が確認されている。一般遺跡69か所を時代別にみると縄文時代50、弥生時代47、古墳時代21、奈良・平安時代65、中世42となっている。

縄文時代では野底川を逆上った谷間の姫宮遺跡で草創期の表裏縄文土器片が発掘調査によって検出され、柏原台地の山裾近くよりこの期とみられる石器が地主によって採集され保管されている。早期の遺跡は発掘調査例はないが、比較的山寄りの扇状地に僅か採集され、前期になると遺跡数はやや増えてはいるが低位段丘面の飯沼・別府では未確認である。中期には南条最下位段丘面を除き全地域にみられて

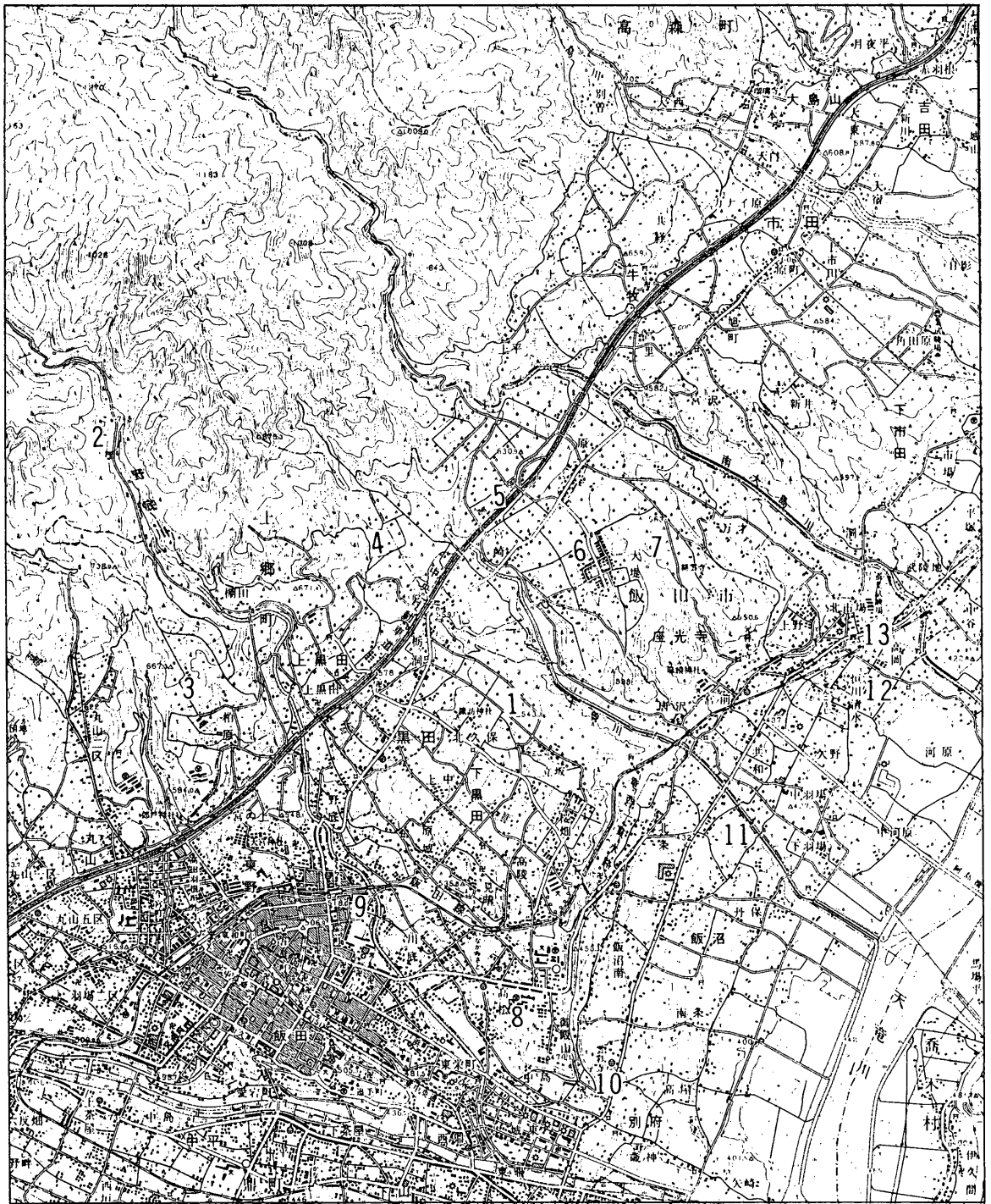


图1 大明神原遺跡地形 - 位置図, 及び周辺重要遺跡図

0 2000m

- 1. 大明神原 2. 姫宮 3. 柏原 4. 米ノ原 5. 宮崎A・B 6. 座光寺原 7. 中島
- 8. 高松原 9. 大門町 10. 雲彩寺古墳 11. 堂垣外 12. 恒川遺跡群 13. 高岡1号古墳

いる。これが後期には衰退を示し8遺跡、晩期には3遺跡と減少を示すのは飯田地方にみられる現象である。

弥生時代は前期は未発見であり、中期では堂垣外の発掘調査では阿島式、北原式的好資料の出土をみており、低位段丘に中期土器が多く表面採集している。後期になると全段丘面・扇状地に遺物の散布がみられ、山裾の柏原遺跡では座光寺原式の甕の完形品さえ出土している。

古墳時代では、古墳32基があり、後期古墳である。大半が別府台地端部に並び1部が黒田と飯沼に散在する。天神塚（雲彩寺古墳）は前方後円墳であり、県史蹟指定となっている。集落をみると14か所があげられているが別府・飯沼の低位段丘面にあり、中期から後期にかけてのものである。高松原段丘面より上の台地には僅かに遺物の散布をみるにすぎない。

奈良・平安時代には全域に遺跡が広がり、堂垣外の周辺は座光寺恒川遺跡群との関連がみられる。

上郷町外の近隣の主要遺跡をみると、縄文時代では、野底川を隔てた大門町遺跡では中期中葉の好資料が発掘され、北の土曾川を隔てた宮崎A遺跡では、中央道遺跡発掘調査で早期押型文土器、宮崎B遺跡では中期後半Ⅲ期の好資料の出土をみている。座光寺原は弥生後期前半の座光寺原式、中島遺跡は弥生後期後半の中島式土器の標準遺跡であり、天竜川を隔てた低位段丘面にある阿島遺跡は弥生中期阿島式土器の標準遺跡である。座光寺恒川遺跡は弥生中期後半恒川式土器の標準遺跡であり、国道153号座光寺バイパスに伴う発掘調査で弥生中・後期、古墳時代前～後期、奈良・平安時代の貴重な資料の多く出土し、また、遺構・遺物からみて郡衙址ともみられる重要遺跡であることが確認された。これに隣接する高岡1号古墳は県指定の史蹟となっている。

Ⅱ 発掘調査経過

昭和59年度、上郷町は大明神原に農業構造改良事業の一環として北面の農道改修工事を実施することになった。もとより、大明神原は注目される遺跡であり、工事に伴う発掘調査が上郷町教育委員会によって実施されたのが今次I次調査である。

計画道線は現在の道路の両側の拡幅であり、調査可能幅は1～2mの限定された範囲である。計画道路の東100mは遺物の散布がみられた地域で、ここに調査の重点をおき、西側は凹地となる旧流路を示す地帯は工事中の立合調査をすることにした。

発掘調査日誌

- 9月10日（はれ） 器材運搬、道路北側の拡幅部にグリッド設定、調査を始める。土壙1号、1号住居址を検出する。
- 9月11日（くもり・はれ） 1号住居址調査、北3分の1を残すのみで道路によって切られる。完掘、測量。土壙2・3号検出、土壙1号とともに完掘・測量。道路計画線の東端部設計変更となり、道幅広くなり、グリッド調査2号住居址を検出する。
- 9月12日（くもり・はれ） 2号住居址調査。柱列址1号検出。道路南側を重機で表土排除。
- 9月13日（くもり） 2号住居址完掘・測量。柱列址1号調査、掘り上げ、測量。土壙4・5号検出、完掘、測量。道路北側の調査を終わる。道路南側の調査にかかり、3号・4号・5号・6号住居

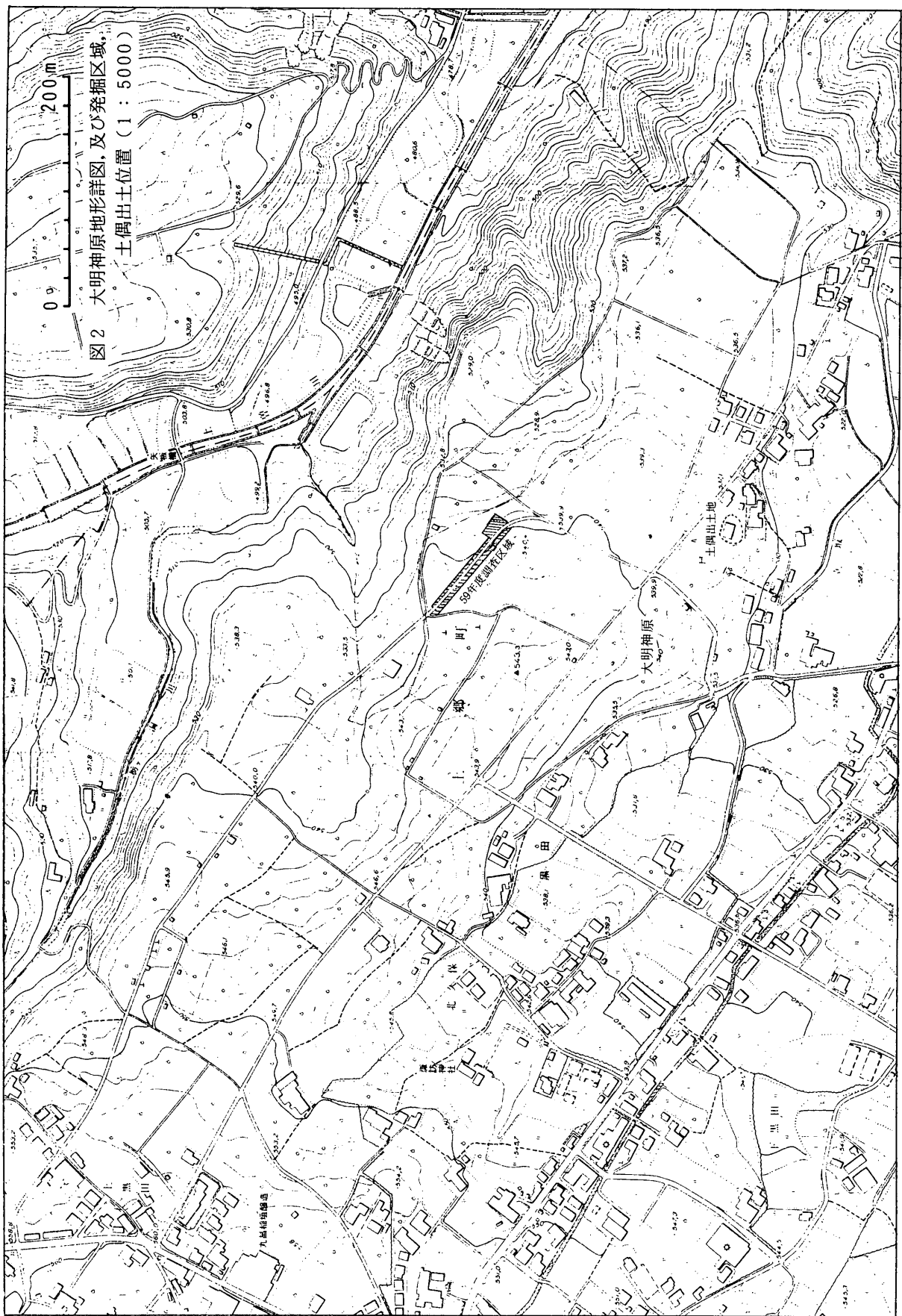


図2 大明神原地形詳細図, 及び発掘区域,
土偶出土位置 (1:5000)

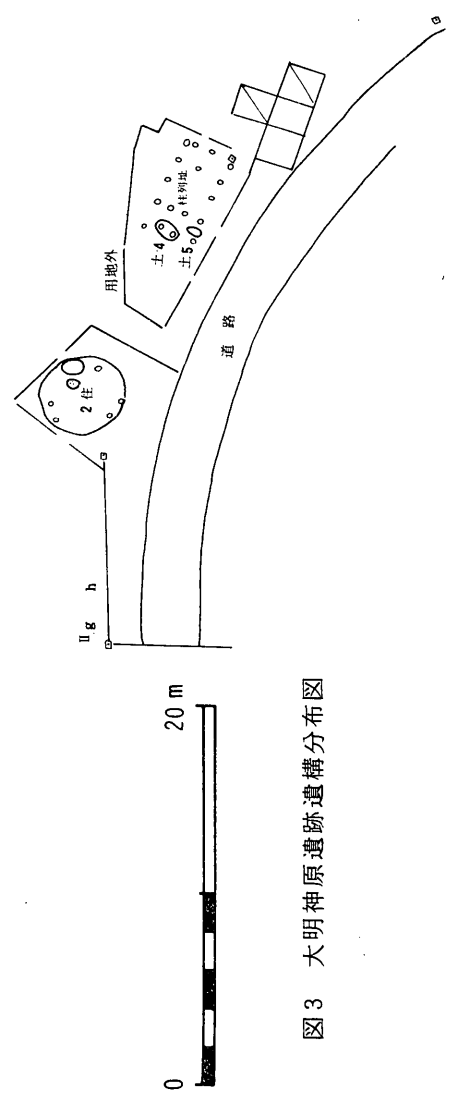
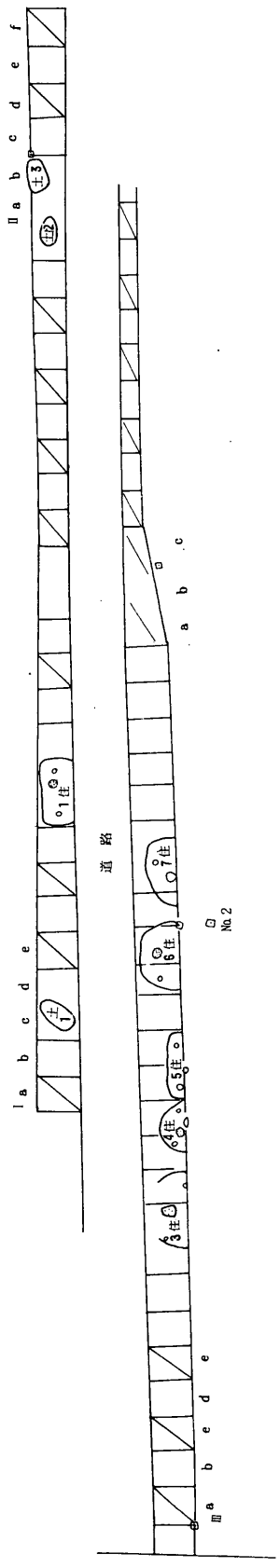


图3 大明神原遺跡遺構分布図

址を検出する。

9月14日（雨・くもり） 午後、各住居址のプランを確かめる。いずれも用地外の南にのびる。

9月15日（雨） 敬老の日、休み。

9月16日（雨・くもり・時々はれ） 3号住・4号住完掘・測量。5号住・6号住調査。

9月17日（はれ） 7号住居址を検出。5号住・6号住・7号住居址完掘・測量。7号住より東へグリッド延長、調査するが遺構、遺物なし、器材の大半を撤収する。

9月18日（くもり・のち雨） 7号住居址の再調査、全体測量をなす。西側の凹地の工事中の立合調査を調査期間中行なうが、旧流路の砂礫の堆積であり、さらに西は黒土の堆積はなく二次堆積の砂質のロームであり、遺構・遺物の発見はなかった。現場調査を終了する。

現場作業終了後、遺物の整理、遺構図の整理をなし、遺物の作図・拓本・製図をなし、原稿執筆にとりかかった。

Ⅲ 発掘調査結果

昭和59年度、大明神原遺跡発掘調査は、大明神原北面の道路拡幅工事に伴うもので長さ100m、幅1～2mの限定された範囲であり、このため遺構の全容を知るものは僅であった。

本次発掘調査された遺構は次の通りである。

1. 住居址 7軒——縄文中期5，弥生後期2
2. 柱列址 1
3. 土 壙 5基

1. 住 居 址

1号住居址（図4）

I i グリッドに発見され、ここは隣の畜舎建設時重機や自動車の通路となったため表土は堅く調査に苦労した。北3分の1を残すのみで他は現道路開設時に削られていた。東西3.75mの隅丸方形をなし、ローム層に15cm前後掘りこむ弥生後期の竪穴式住居址である。柱穴は2つ発見されているが、その配置からみて主柱穴は4つとみる。炉址は柱穴間のやや東に寄っており、地床炉である。

遺物（図5）は少なく土器1は高杯の杯部とみる小片であり、その他図示しないが無文片が僅にあり、時期を判明でき

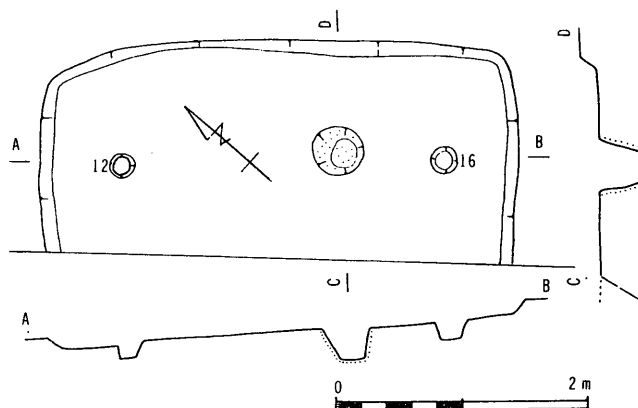


図4 大明神原1号住居址

ないが住居址の形態からみて弥生後期中島式かと思われる。石器2は横刃形石器で玄武岩製，重量49g。3は硬砂岩製の石鎌の基部を欠くものである。

2号住居址 (図6)

東の道路カーブ地点の埋立地となる拡張部に発見され，桃の木によって荒れが目立つ。南北径4.25m，東西径4.1mの不整楕円形をなし，ローム層に15cm前後掘りこむ縄文中期後葉竪穴式住居址である。床面はあまり堅くなく，支柱穴は5ことみられ，壁に沿ってある。炉址は中心より東に片寄っており，地床炉で，桃の木の根によって崩されており，焼土が散らばっていた。炉址の南に土壙状の大きな円形の掘りこみが付き貯蔵穴ともみられるものである。

遺物(図9の1~3)は僅少で図示した土器は1・2であり他は小片数点があったのみである。1は細い粘土紐を貼付するもので縄文中期後葉の前半にみるものであり，2は後半にみるものであり，磨滅しておりはっきりしない。3の磨石斧は基部を欠く。

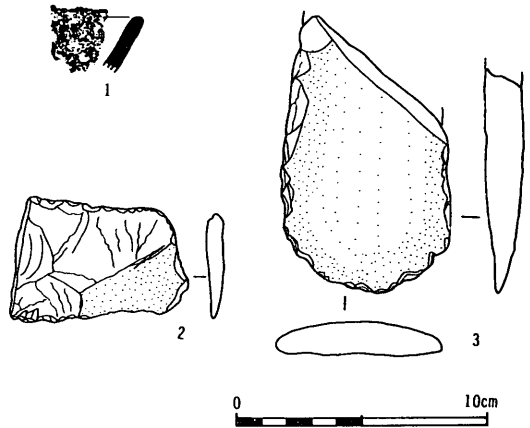


図5 大明神原1号住居址出土遺物

3号住居址

道路南側拡張部の西側に発見され，北は現道により1部は切られ南は用地外となり，炉址を中心とした部分が調査された。東西径4.2mの南北に長軸をもつ楕円形をなすとみられる。ローム層に25cm前後掘りこむ縄文中期後半の竪穴式住居址である。床面は堅く，柱穴は2こ発見されているが，配置からみて支柱穴は4ことみる。炉址は中心より北に寄っており，石囲炉であり，北側は石を抜いた痕跡を残している。

遺物(図9の4~13) 土器は口縁部は無文となり，胴部は縄文の地文を太い沈線で切り，結節縄文を施すが主体となり，中期後半IV期に位置づくものである。石器に11の敲打器，12・13の横刃形石器がある。

4号住居址 (図7)

3号住居址の東1mにあり，3分の2近くは用地外となる。東西径3mであるが南に延びて楕円形をなすとみられ，ローム層に15cm前後掘りこむ小型の竪穴式住居址である。床面は堅く，炉址は中心より北に片寄っており，2この石の抜かれた痕跡をみるが地床炉である。柱穴は3こ発見されているが，支柱穴の数ははっきりしない。炉址の南に貯蔵穴ともみる掘りこみがある。

遺物(図9の19~26) 土器は少なく，小片であり，はっ

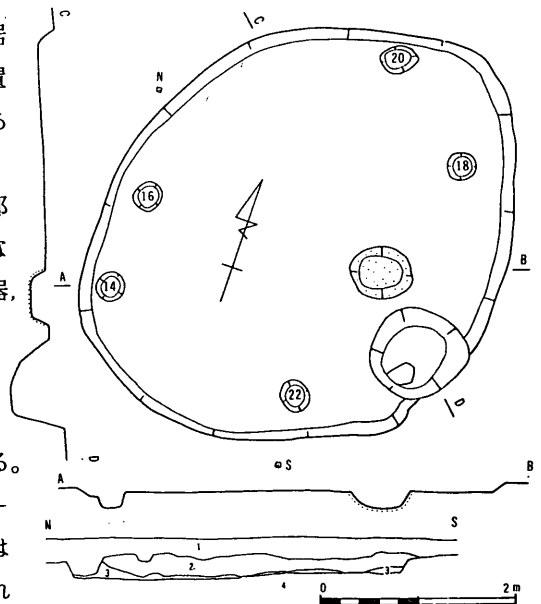


図6 大明神原2号住居址

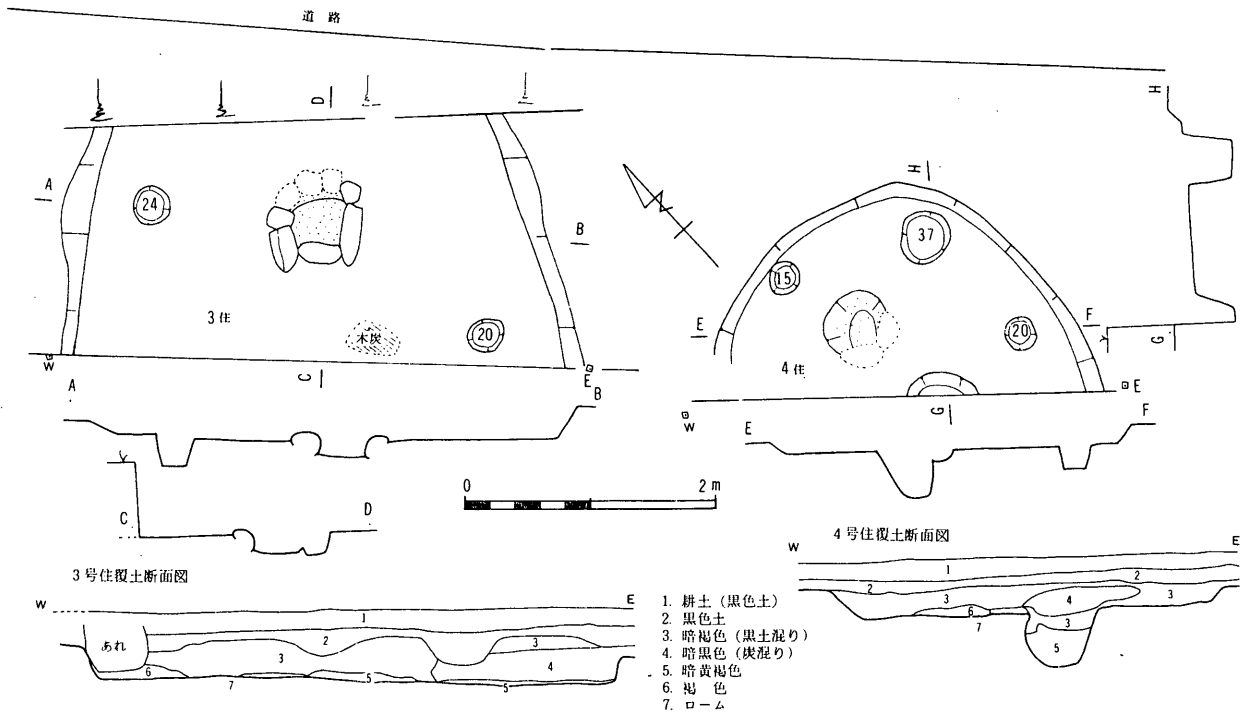


図7 大明神原3号住居址・4号住居址

きりいえないが縄文中期中葉に位置づくものである。石器には26の磨石斧と25の磨石の出土をみている。

5号住居址 (図8)

4号住居址に隣接し、南4分の3程は用地外となる。東西辺が3.78mの隅丸方形をなし、ローム層に15cm前後掘りこむ弥生後期竪穴式住居址である。床面は堅く、柱穴は2つ発見されているが、その配置からみて支柱穴は4つとみる。炉址は北側の桁下の中心よりやや西よりの内側にあり、浅く掘り凹めた地床炉である。遺物は無文の小破片を僅かにみただけであり、中島式とみられる。

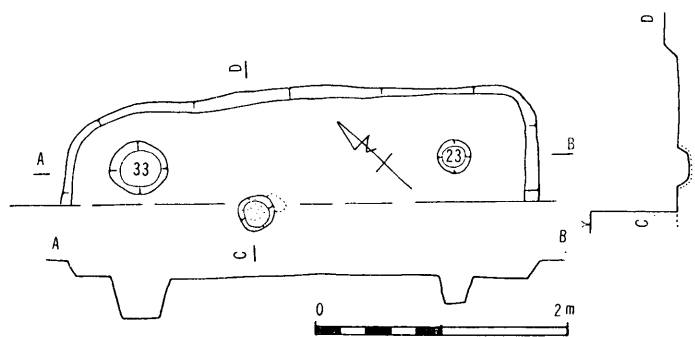


図8 大明神原5号住居址

6号住居址

5号住居址の東2.5m、7号住居址の西1.5mにあり、北の1部は現道路によって切り取られ、南側は用地外となり、中央部のみの調査となった。東西径3.6mの楕円形をなすとみられ、ローム層に20cm前後掘りこむ縄文中期後半の竪穴式住居址である。床面はあまり堅くなく、柱穴は2つ発見されているが、その配置からみて支柱穴は4つとみる。炉址は中心より北に寄っており、円形の石囲炉であったとみられ、石を抜かれた痕跡をはっきりと残している。

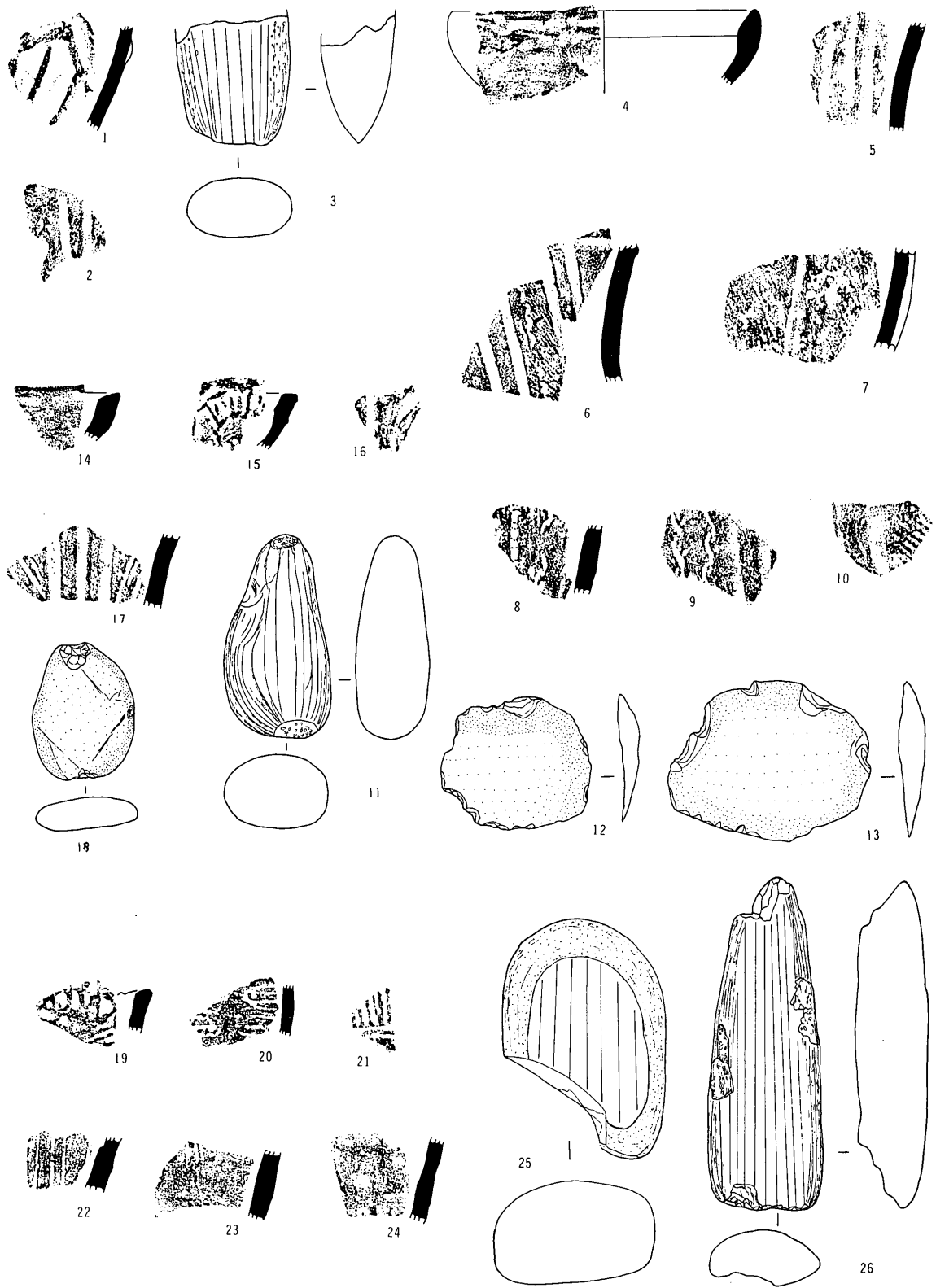
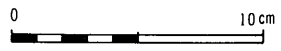


图9 大明神原2号住・3号住・4号住・6号住居址出土遺物(1:3)



1~3...2住, 4~13...3住, 14~18...6住, 19~26...4住

遺物（図9の14～18）は少なく土器は縄文中期後半Ⅲ期またはⅣ期とみるもので小片のためはっきりしない。15の細い粘土紐の貼布による円文を構成するものであり、中期の古い要素をもつものとみるが小片のためはっきり時期をいえない。石器は、18の石錘1この出土をみたにすぎない。

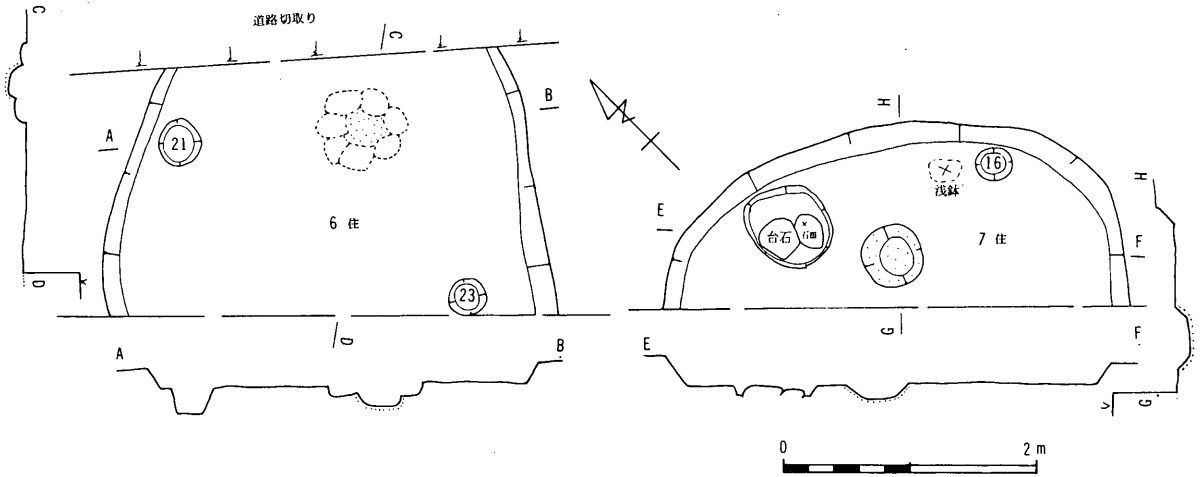


図10 大明神原6号・7号住居址

7号住居址（図10）

南側の大半は用地外となり、北側の4分の1程度の調査に終わっている。東西径3.7mの円形をなすとみられ、ローム層に20～25cm掘りこむ縄文中期中葉の竪穴式住居址である。床面は堅く、柱穴は1こ発見されたのみで、主柱穴の数は不明である。炉址は中心より北に片寄っており、浅い掘りこみの地床炉である。炉址の西に浅い掘りこみがあり、この中に石皿と台石が置かれていた。

遺物（図15の1～7）土器は少なく、深鉢に2～4と浅鉢1がある。1の浅鉢は口径27.7cm、1この凸起をもち、これに平行した段をもって下がり平縁となる。口縁部は2条の連続爪形文をめぐらし、これより下がる2条対となる爪形文を施すもので胴部は無文となる。2は4号住出土の図9の20と同一個体とみられるもので半截竹管によるS字状懸垂文を施す。3は、半截竹管による小さな波状文を描くものである。4は平出Ⅲ類Aであり、縄文中期前半に位置づくものとみる。

石器には7の横刃形石器、5の石皿、6の台石の出土をみている。

2. 柱 列 址

柱列址1号（図11）

東の道路カーブ地点の今次工事の東端部に発見され、南地3.7m×東西2.5mに並ぶ柱列であるが、その配置は建物址としてはやや不規則であり、その北側に不規則な柱穴が4こ付く。遺物には図15の12の打石斧1こが検出されているが、その時期は決めかねる。

3. 土 壇

土壇1号（図12）

道路北側Icグリッドに発見され、径東西2.3m、南北1.05mの長楕円をなし、東は深さ40cm、西側は

60cmと二段にローム層に掘りこむ土壌であり、主軸方向N94°Wを指す。覆土は断面図にみるように複雑な入りこみをなす。遺物は図15の10の土器片1点であり、口唇部に深い刻みをめぐらし、無文で器面は凹凸をもち、焼成は固い。縄文前期前半に位置づくものとみられる。

土壌 2号 (図13)

道路北側 IIa グリッドに検出され、1.7m東に土壌3号がある。東西径143cm、南北径85cmの楕円形をなし、ローム層に30cm掘りこむ土壌であり、主軸方向N34°Wを指す。遺物に図15の8の玻璃質安山岩製の石錐の出土をみている。縄文時代の土壌とみるが、その時期は不明。

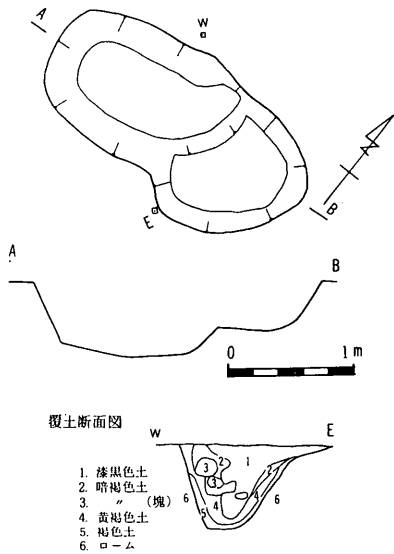


図12 大明神原土壌 1号

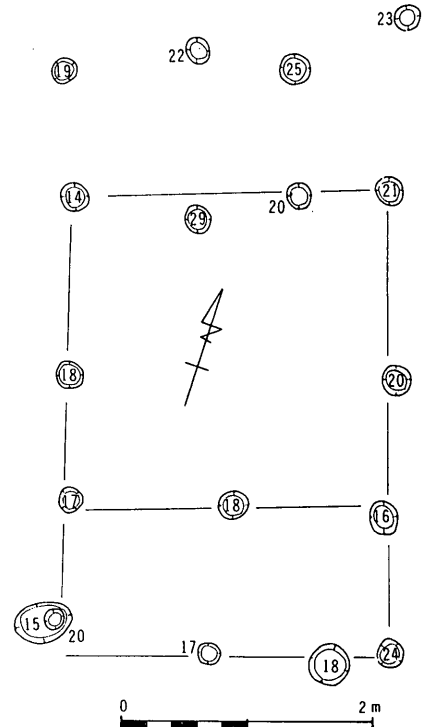


図11 大明神原柱列址 1号

土壌 3号 (図13)

土壌2号の東1.7mにあり、東西径170cm、南北110cmの楕円形をなし、ローム層に45cm掘りこむ土壌であり、主軸方向N55°Wをさす。遺物はなく、その時期は不明であるが縄文期のものと思われる。

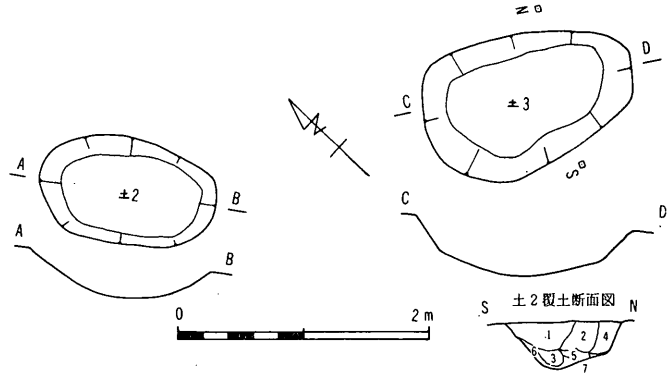


図13 大明神原土壌 2号・3号

土壌 4号 (図14)

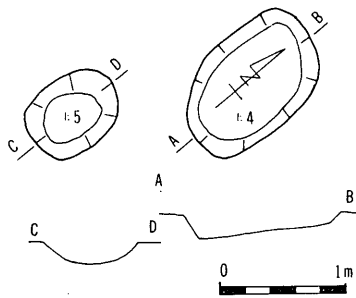


図14 大明神原土壌 4号・5号

柱列址の西に発見され、その柱穴2こが中に掘りこまれていた。径南北120×東西80cmの楕円形をなし、ローム層に10~20cm掘りこみ主軸方向N2°Wをさす。遺物は図15の9の半壊の石鋸の出土をみ、2号住との関連から縄文中期後半の土壌とみたい。

土壌 5号 (図14)

土壌4号の西55cmに並び、径南北80×東西60cm、ローム層に20cm掘りこみ、主軸方向N4°Eを測る。遺物は図15の11の

石錘1この出土をみ、土壙4号と同時期の縄文中期後半の土壙とみたい。

4. 大明神原遺跡昭和59年度発掘調査出土石器一覧表（表1）

注. 打……打石斧, 横刃……横刃形石器, 硬……硬砂岩
凝……凝灰岩, 花……花崗岩

遺構	図No.	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	時期	備考
1住	5	2	横刃	玄武岩?	4.7	6.5	49	弥・後	
"	"	3	石鋏	硬	9.3	6.6	142	"	基部欠け
2住	9	3	磨石斧	凝	6.2	5.0	190	縄・中・後	"
3住	"	12	横刃	硬	6.5	7.3	55	"	
"	"	13	"	"	7.7	9.3	105	"	
"	"	11	敲打器	凝	10.1	5.0	305	"	
4住	"	25	磨石	花	11.0	7.9	690	縄・中・中	1部を欠く
"	"	26	磨石斧	凝	15.8	5.5	517	"	
6住	"	18	石錘	硬	6.7	5.0	75	縄・中・後	
7住	15	5	石皿	花	27.0	20.0		縄・中・中	
"	"	6	台石	"	26.0	26.3		"	
"	"	7	横刃	凝	6.3	8.3	72	"	
土2	"	8	石錐	ハリ質安山岩	4.2	1.5	6	縄	
土4	"	9	石鋏	黒曜石	1.8	?		縄・中・後	半壊
土5	"	11	石錘	硬	6.2	3.3	37	"	
柱列址 1	"	12	打	"	10.3	5.3	102	?	

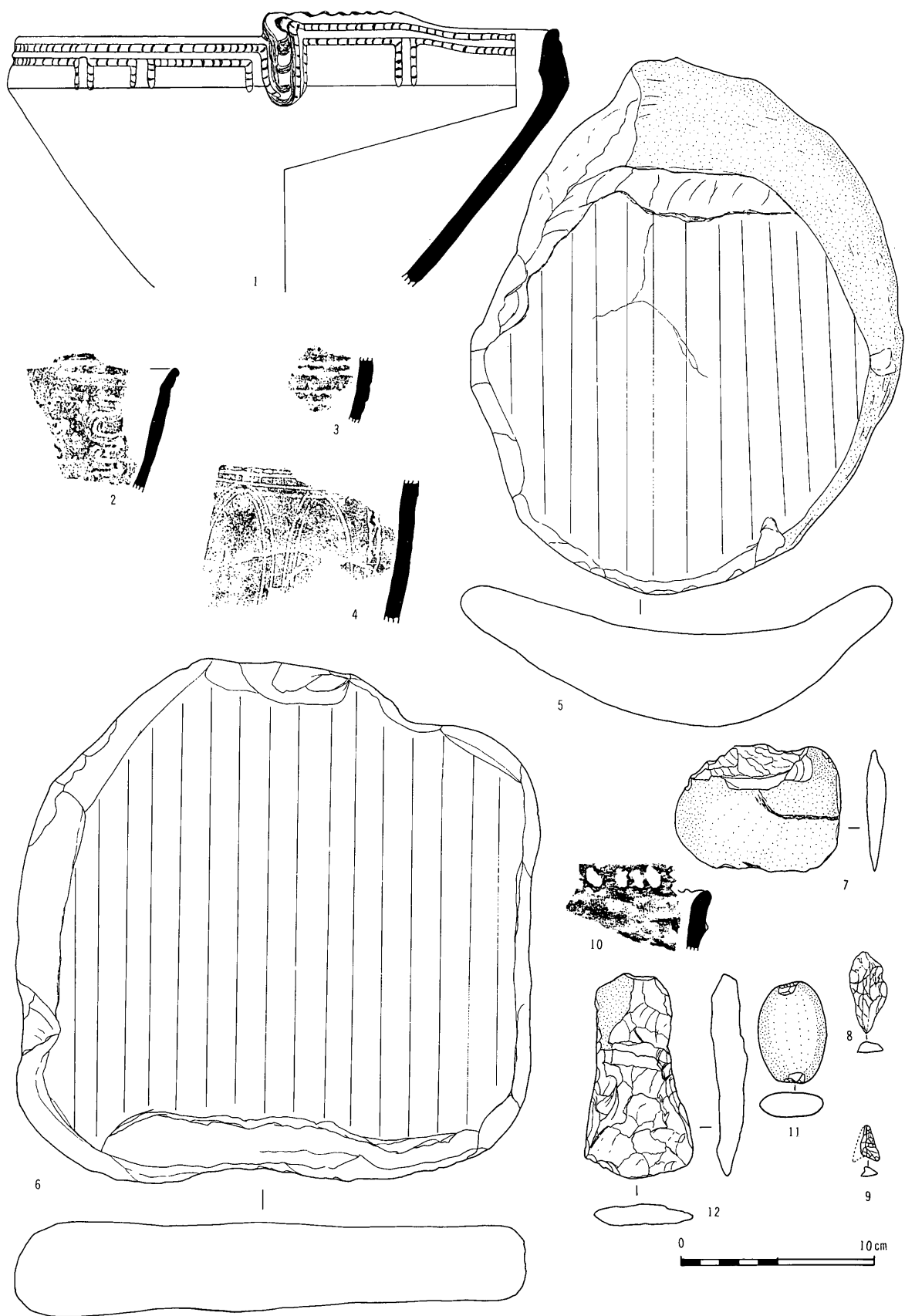


图15 大明神原7号住居址·土壙1号·2号·3号·5号, 柱列址1号出土遗物(1:3)

1~7…7住, 8…土2, 9…土4, 10…土1, 11…土5, 12…柱列址

IV 大明神原台地南縁部出土遺物

昭和22・23年今井義富氏が黒田2452-3番地で壁土を採集する際に出土したのが図16の土偶と図17の土器・石器である。今井氏の話によると、地表下1.5位に径80cm位の焚火跡があり、それを中心に遺物が発見されたとのことである。

1. 土 偶 (図16)

いわゆる有脚尻張り立像土偶である。脚部を僅かに残して欠くが、丈22.7cm、手は十字に水平に短かく左右にひらいて十字形土偶の特徴をもっている。顔は目は眉のみで押引竹管文が描かれ、鼻は隆起をもち鼻孔と口は刺突で表現された人間の顔である。後頭部は周囲に欠けをみるが頭髪がなく、剥れたものとみられる。河童形土偶ともみられるがはっきりしない。耳とみる位置の両側に吊孔がつく。胸部に乳房を表現する突起があり、胸部から腹部へかけて粘土紐の貼付による正中線が表現されている。胴部は薄く板状

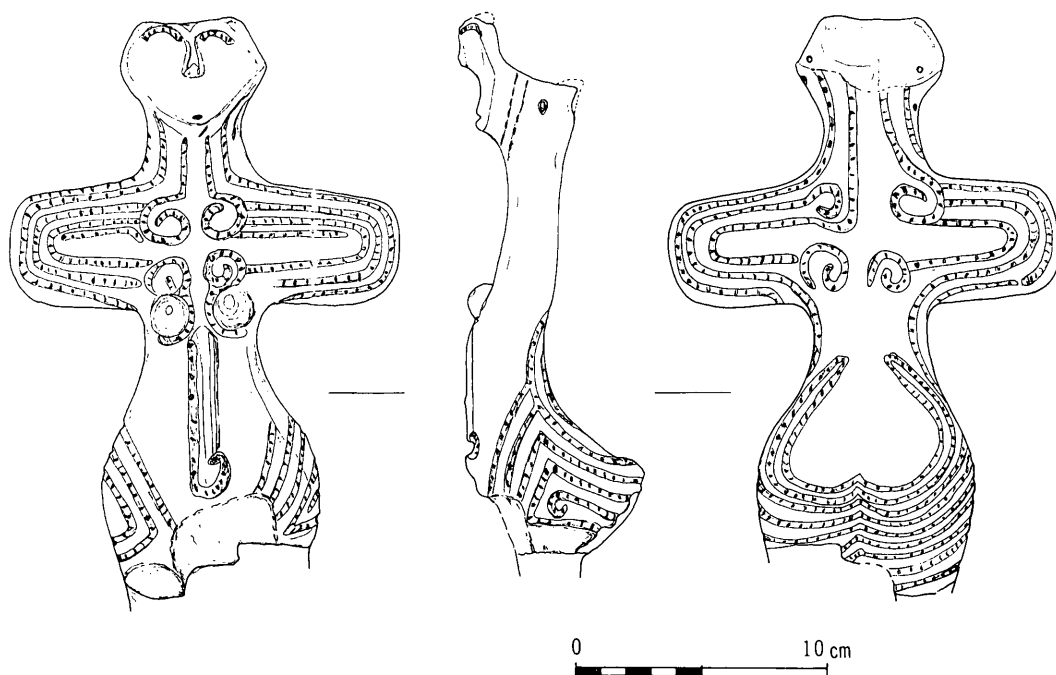


図16 大明神原台地南縁部出土土偶(1:3)

となり、尻は外に張り出して、ハート形に押引竹管文による沈線が施される。脚は僅か残る部分からして太く短かいとみる。

文様は頭部・胸部の両面を除き押引竹管文による沈線によって構成され、手の付根に渦文を上下対におき、それより平行に連続押引竹管文を頸部・胴部の表面・背面に施し、尻部から脚部へかけてはハート形「∩」形状に施文されている。

尻張り土偶の古い要素を残すものであるが出土土器からみて下伊那地方縄文中期後半Ⅰ期の時期—上伊那郡中川村刈谷原遺跡出土土偶と同時期とみたい。

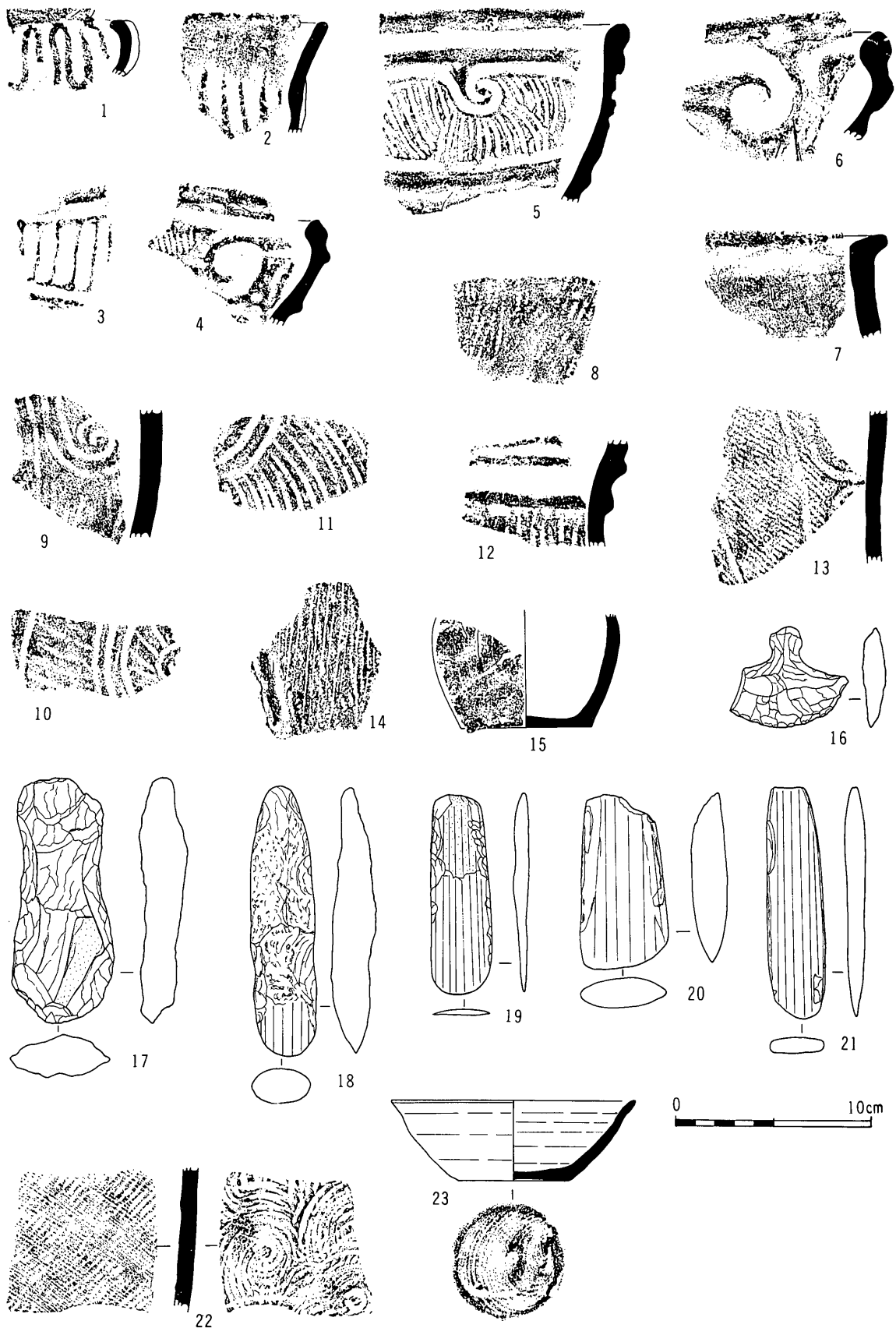


图17 大明神原台地南縁部出土遺物 (1 : 3)

土偶は、ものいれ、まじない、身がわり等に使われた説があるが、出土状況ははっきりしない。貫通孔によって紐で吊され、人体にと対象したものと考えられる。

2. 土器・石器 (図17)

土器の出土状況は明らかでなく、時期的にも新旧混ざっている。1～3はいわゆる細隆起線文土器で縄文中期中葉終末から後半下伊那地方Ⅰ期への過渡期のものであり、4～15は中期後半Ⅱ期に位置づくものである。

22・23は須恵器であり、22は古墳時代とみられ、23の杯は平安時代のものである。

石器(16～21) 16の石匙はチャート製、縄文前期にみるものであり、中葉では稀である。17は打石斧、18は敲打痕が施される局部磨石斧である。19～21の磨石斧は凝灰岩製であり、19・21は極めて薄くノミとして使用されたともみられる。

大明神原台地南縁部出土石器一覧表(表2)

遺構	図No.	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	時期	備考
	17	16	石匙	チャート	5.0	6.0	25	縄・前	
	〃	17	打石斧	凝	12.4	5.2	230	縄・中	
	〃	18	局部磨石斧	〃	13.6	3.2	126	〃	敲打痕をもつ
	〃	19	磨石斧	〃	10.0	3.1	42	〃	
	〃	20	〃	〃	8.8	4.5	115	〃	
	〃	21	〃	〃	11.5	2.9	63	〃	

ま と め

大明神原遺跡の立地は北を流れる土曾川とその支流栃ヶ洞川の合流点から南西に小さな支流の谷頭浸蝕が進み、その終わる地点から西に凹地が長く延びている。道路改修工事中の立合調査によって、そこは旧流路を示す砂礫の堆積地帯となっている。この凹地帯に面す台地縁部に今次調査では遺構が集中発見されており、また、台地南縁部でかつて宅地造成時に縄文中期後半の住居址とみるが掘り出され、土器片の多くと、土偶の出土をみている。これらからみて、遺跡は大明神原台地縁部に沿って展開されているものとみられる。

今次調査は道路拡張工事であり、幅1～2mの限定された範囲であり、住居址の全容を知るものは2号住のみであり、それも梨の木が植えられており、耕作の荒も多く不十分な調査に終わっている。他は3分の1程度の調査となっている。

住居址の時期をみると縄文時代では中期中葉前半、中期後葉Ⅲ・Ⅳ期があり、弥生時代では後期中島式とみるがあるが、いずれも遺物の出土は比較的少ない。

出土土器をみると、土壙1号出土の無文・口唇に深い刻みをもち、器面に凹凸をもつ縄文前期初頭にみるものである。7号住出土の浅鉢、平出ⅢAの深鉢胴部片、4号住出土の土器片は縄文中期中葉前半に位置づくものとみる。

弥生時代後期住居址1号住・5号住出土の土器はいずれも無文の小片であり、はっきりしないが、中島式とみられるものである。

石器について飯田地方の縄文中期に特に多くみられる打石斧の出土をみた住居址は今次調査においては無く、石器のあり方について今後の課題といえよう。

大明神原遺跡の今次調査は極く限られた一部であるが、各期にわたる遺構・遺物が発見され、昭和22・23年の台地南端部の壁土採り場から出土した土偶をはじめ縄文中期後半の土器・石器、平安時代の須恵器杯等があり、今後引き続き行なわれる農道改修工事に伴う発掘調査に期待されるとともに、重要遺構としての保存が強く要望される。

おわりに、本次調査にあたって地主の方々の御理解、調査にあたっては献身的に作業に尽された方々の御骨折りが大きな力となったことに深謝したい。

(佐藤 魁 信)

I 遺 跡



遺跡全景 — 東より



遺跡全景 — 西より

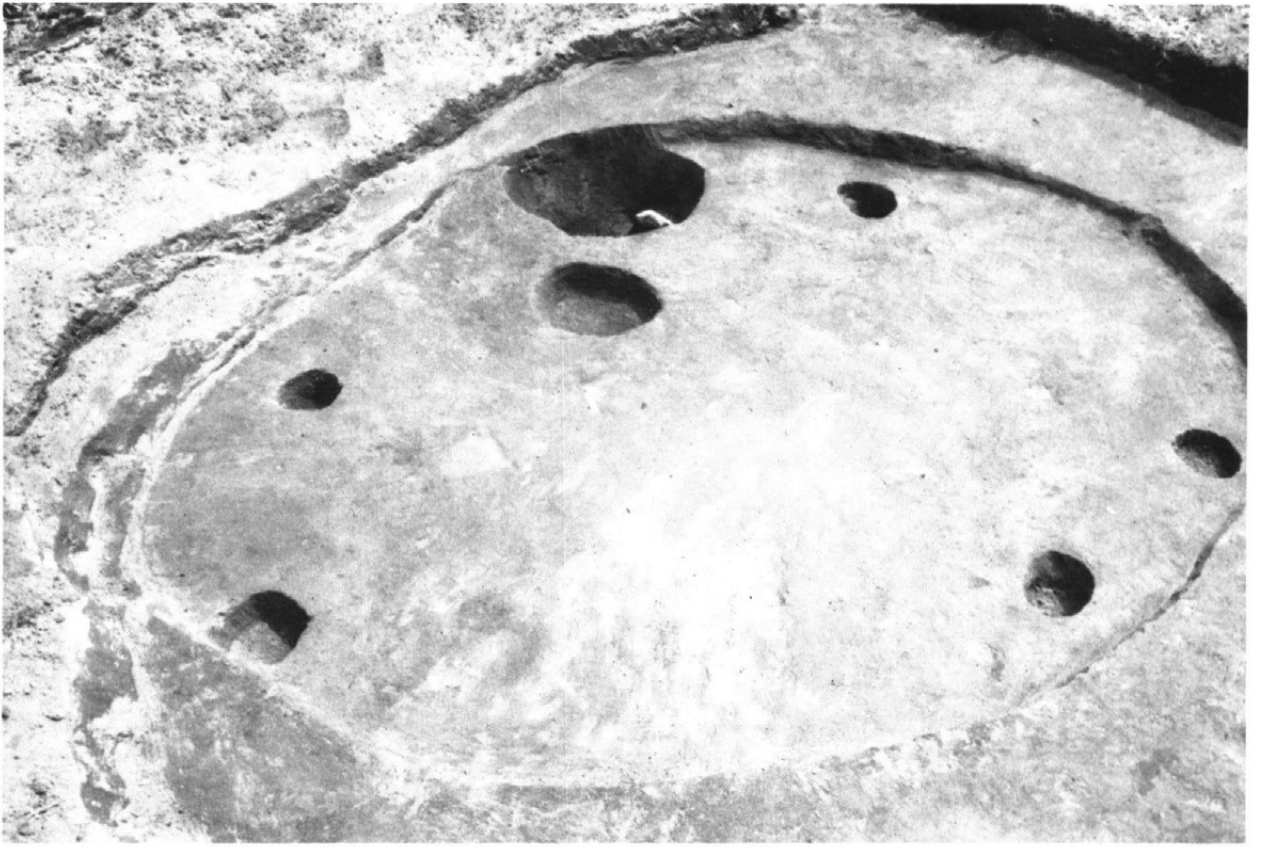
Ⅱ 遺 構



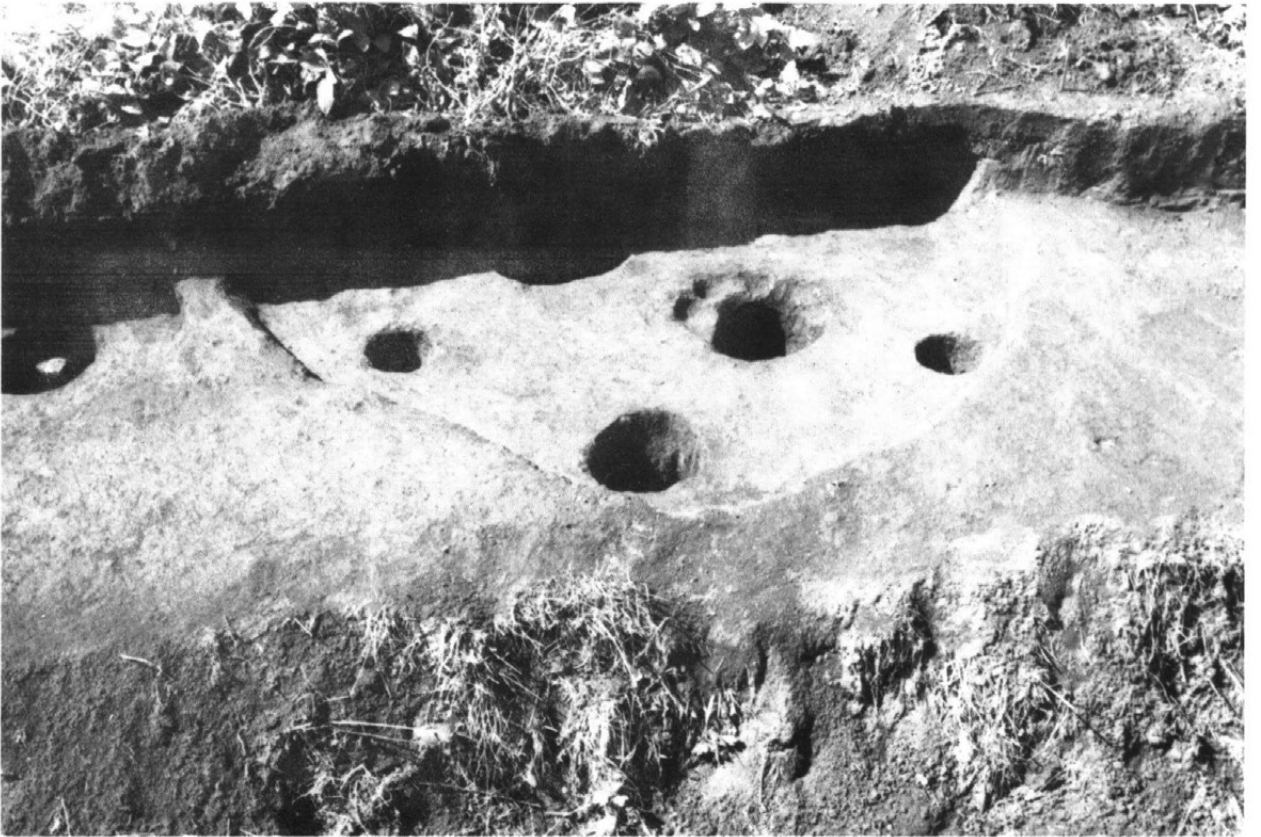
道路西側遺構全景 — 西より



道路西側遺構全景 — 東より



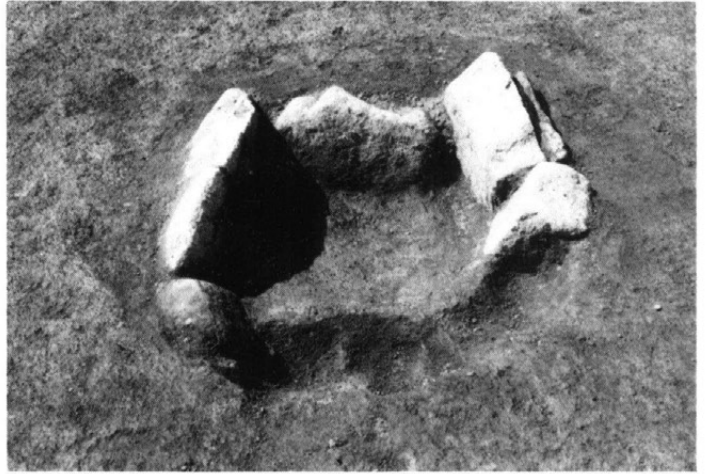
2 号 住 居 址



4 号 住 居 址



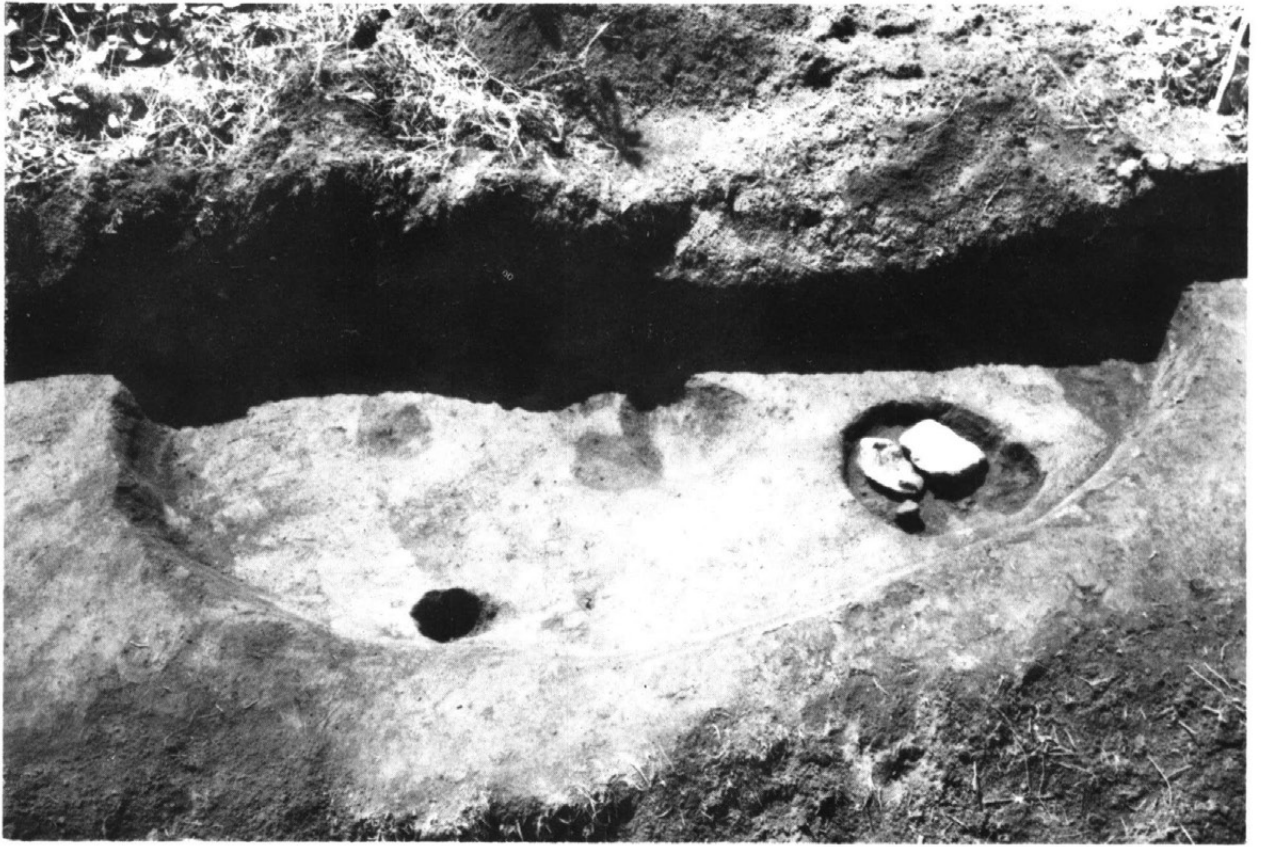
3号住居址



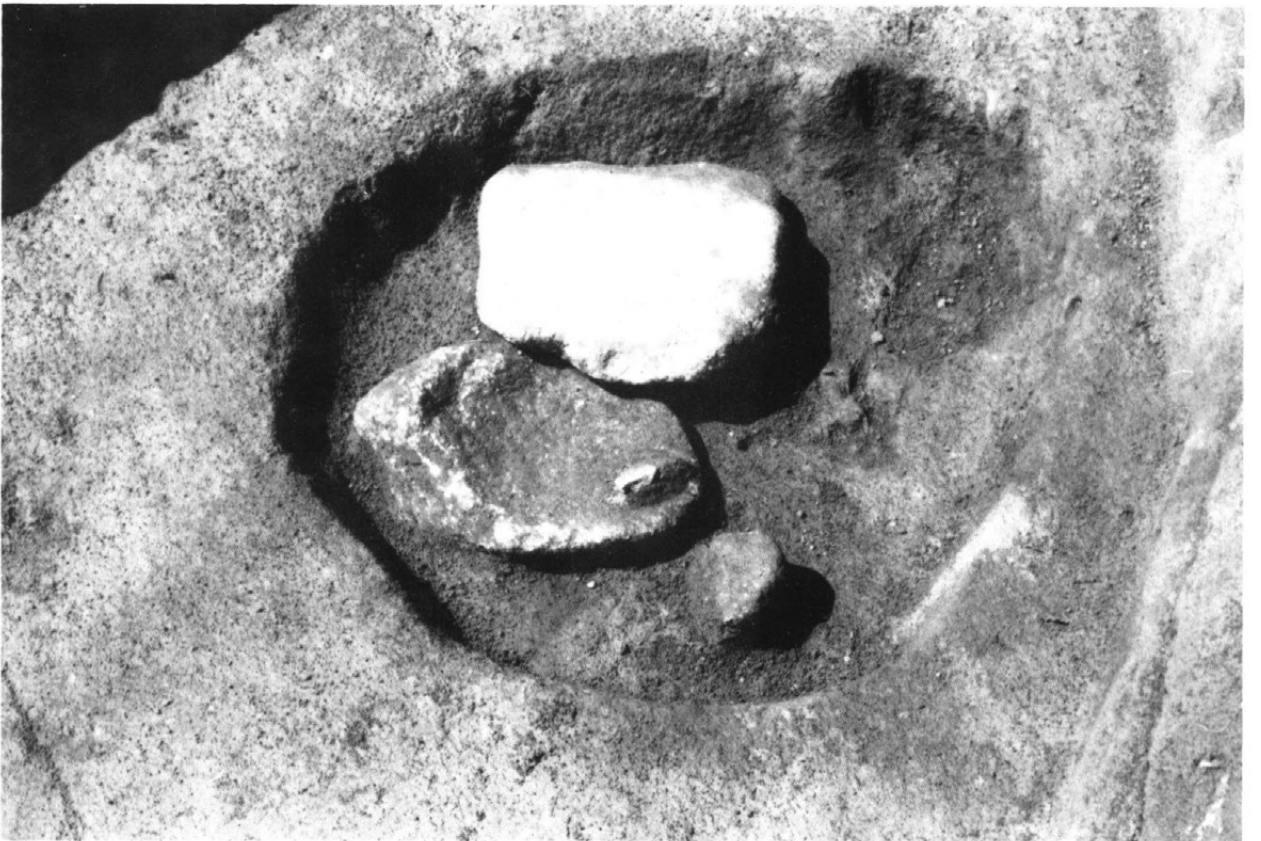
6号住居址

3号住居址炉址

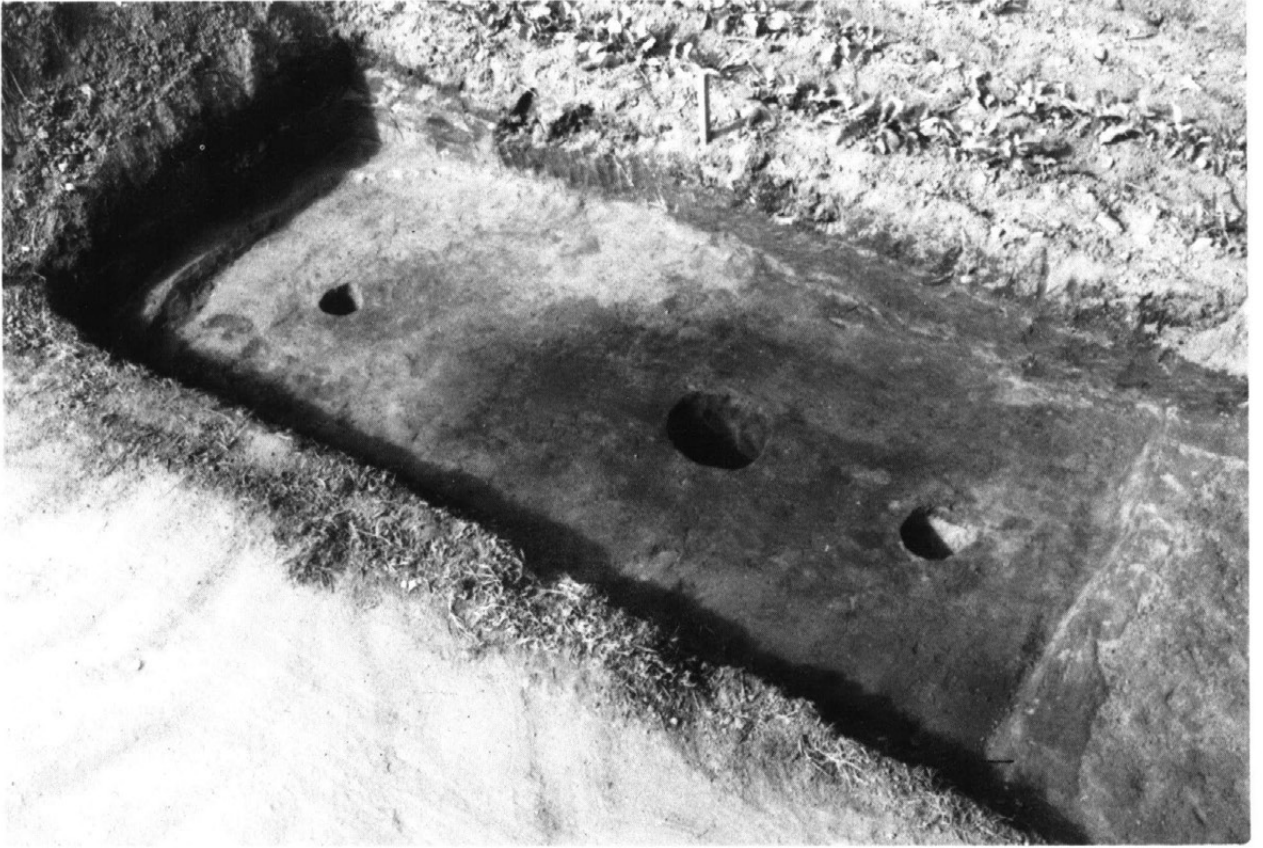




7号住居址



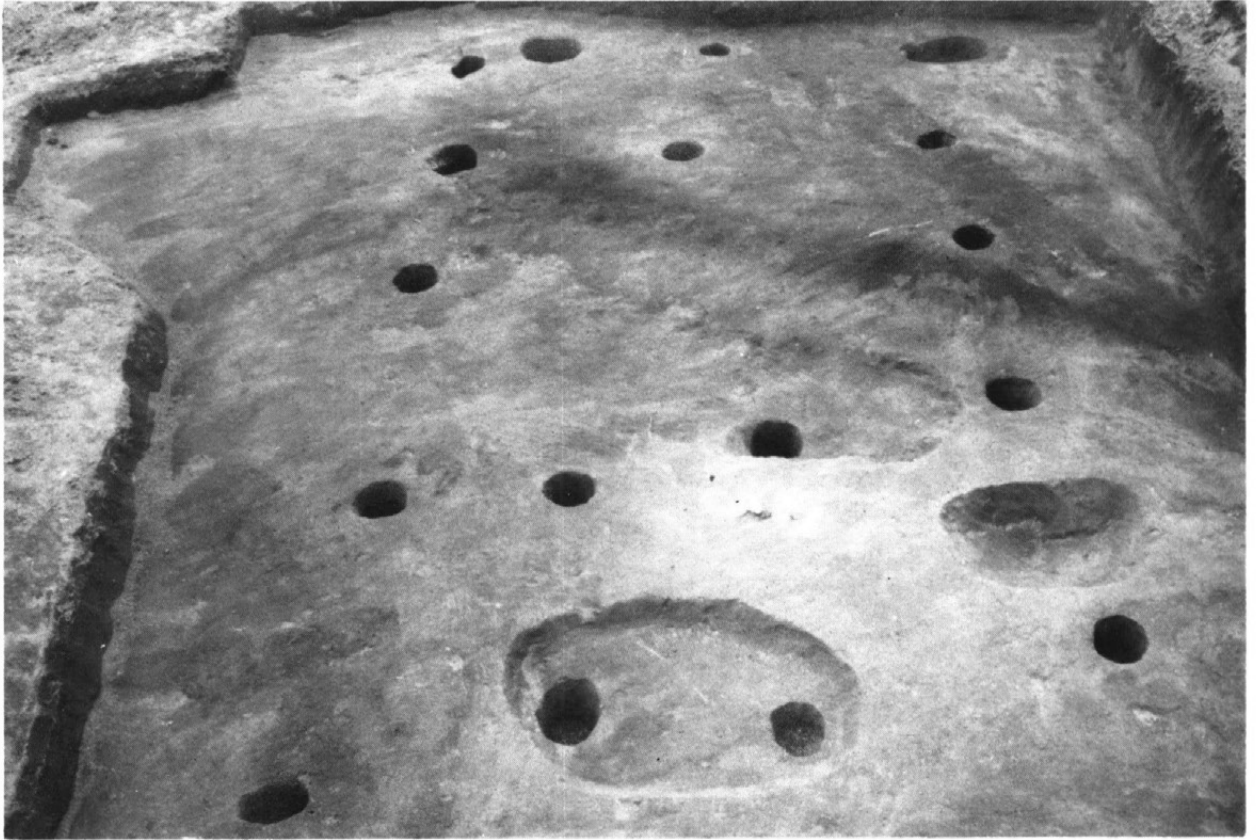
7号住居址石皿・台石出土



1 号住居址



5 号住居址



柱列址1号・土壇4号(中下)・5号(右)



土壇1号

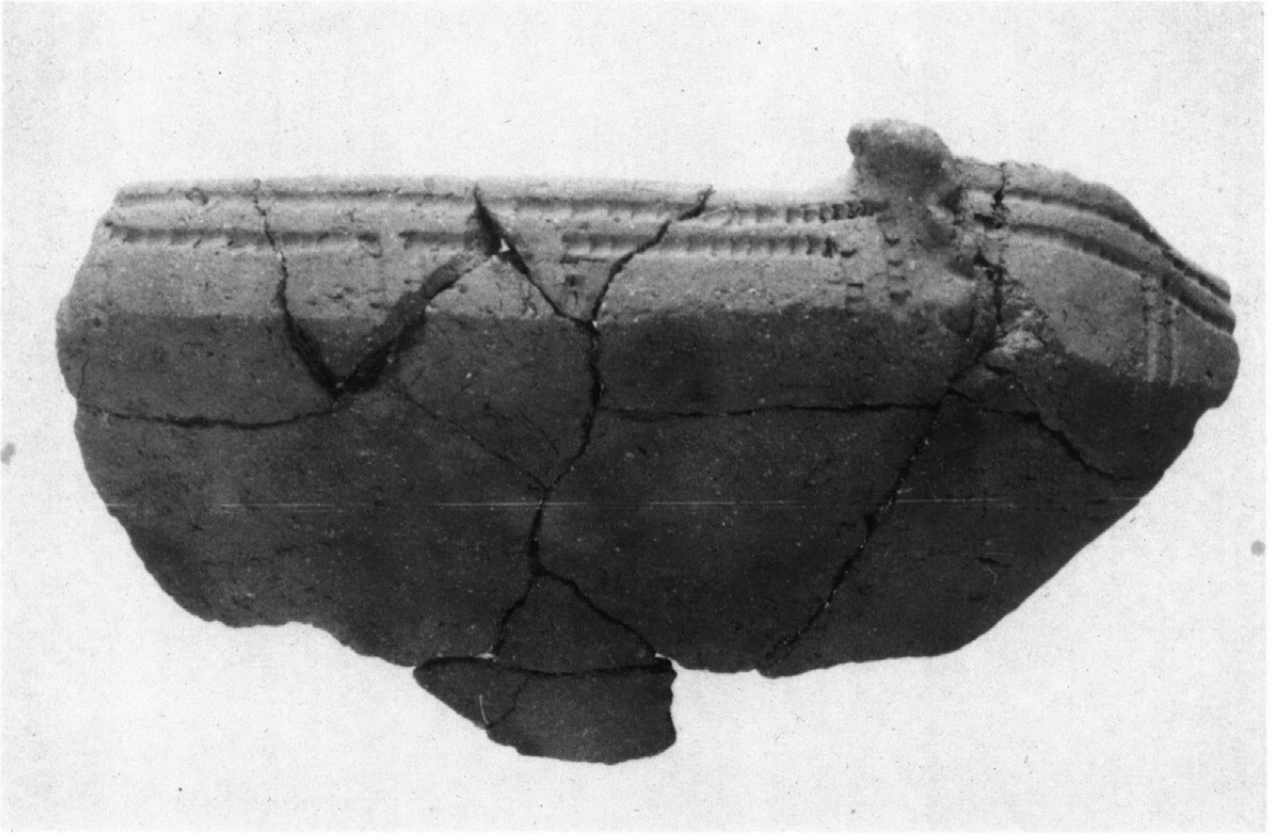


道路北側グリッド調査

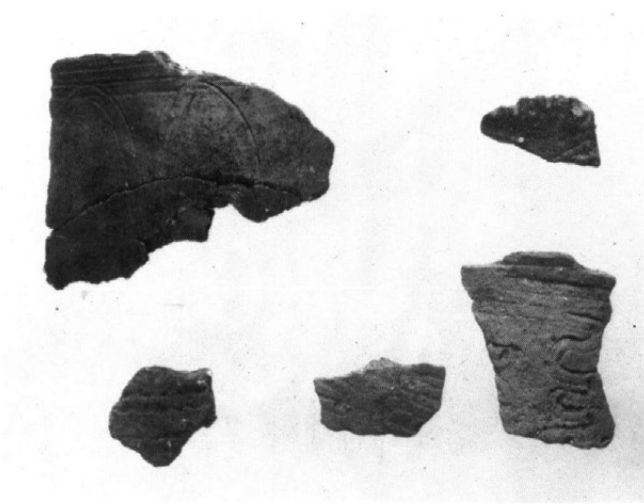


西側凹地の立合調査 — 砂礫層で遺構なし

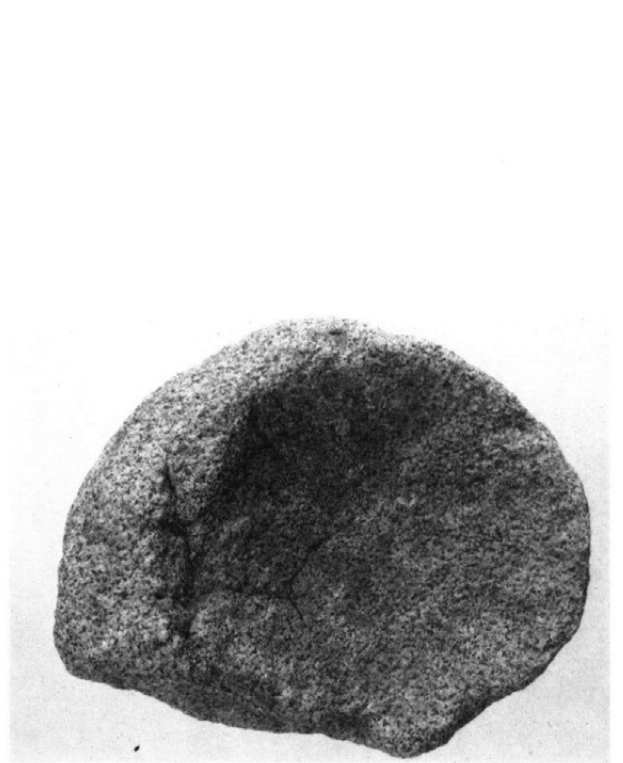
III 遺 物



7号住居址出土浅鉢



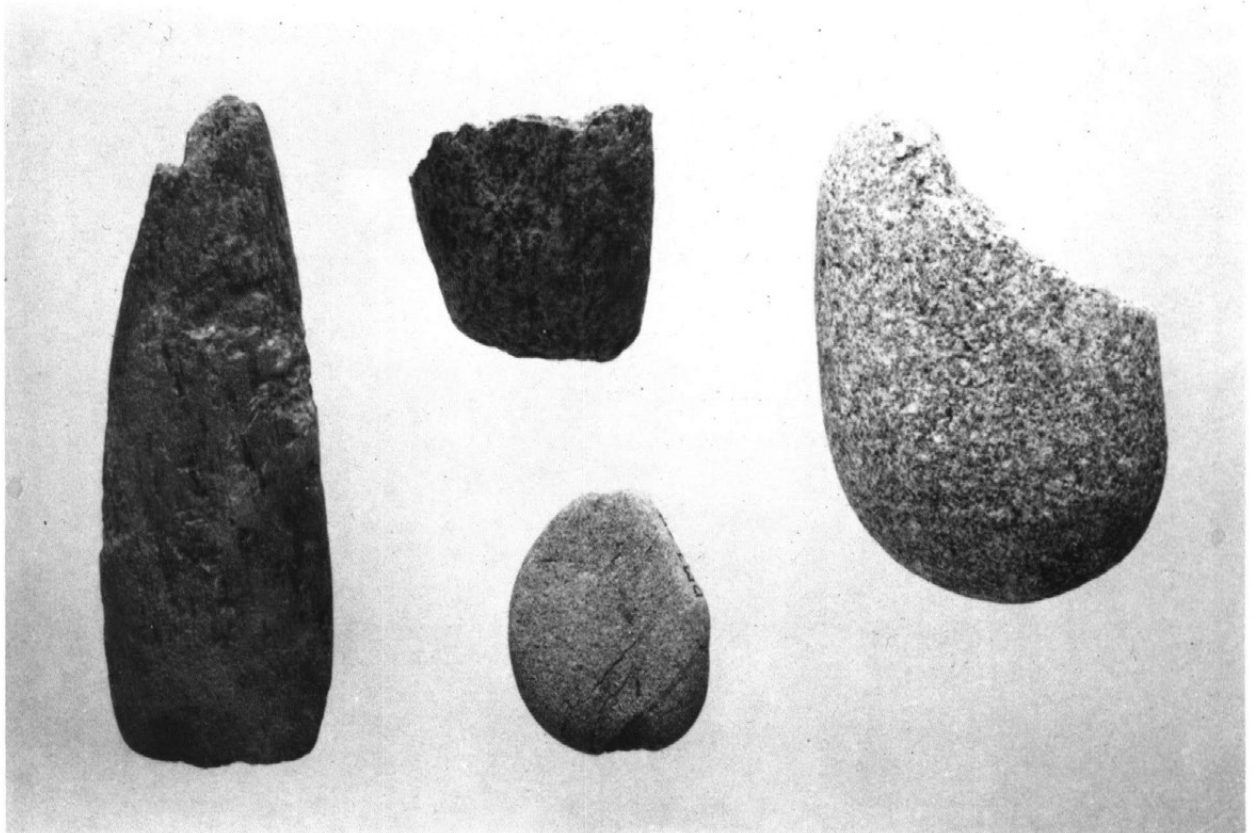
7号住居址出土土器片



7号住居址出土石皿



3号住居址出土遺物



大明神原遺跡I次調査出土石器 左・中下…6住, 中上…2住, 右…4住

IV 発掘スナップ



1号住居址検出

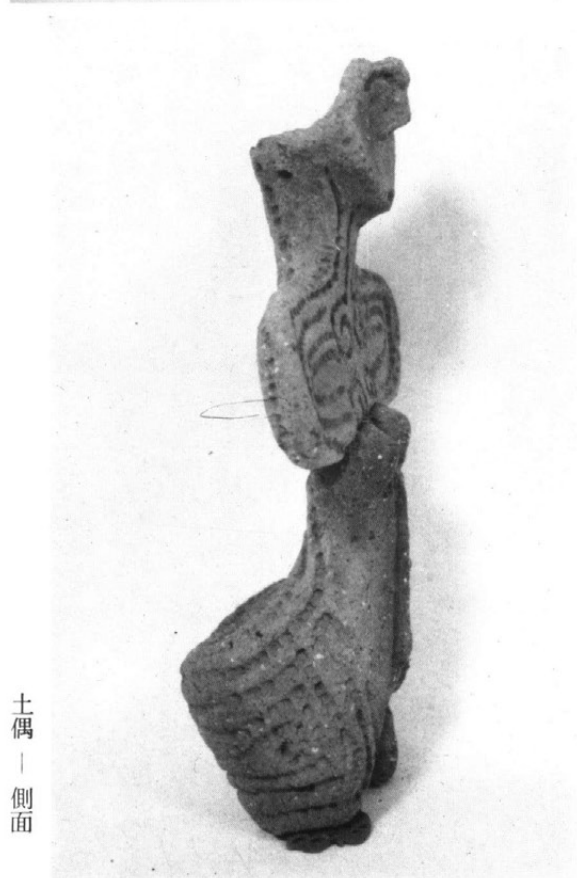


2号住居址調査

V 大明神原台地
南縁部出土遺物



土偶 | 正面



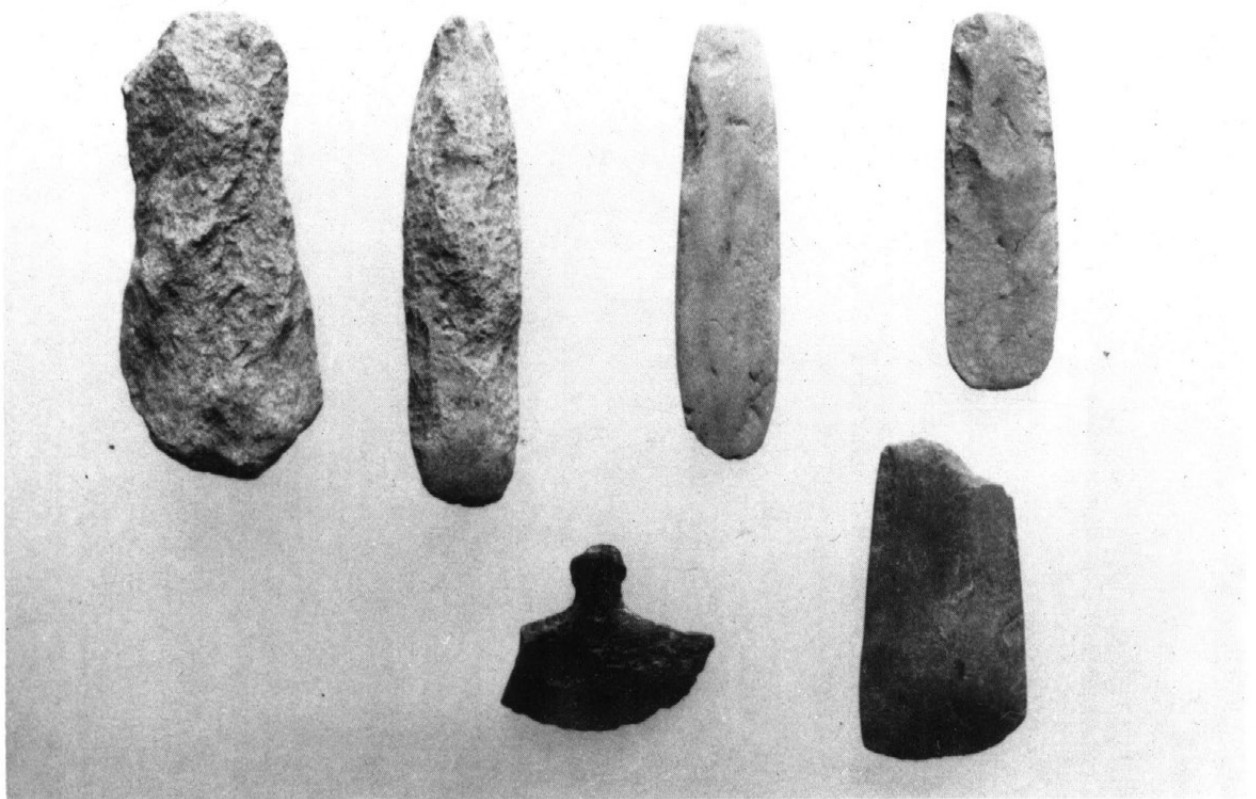
土偶 | 側面



土偶 | 背面



土 器 片



石 器

調 査 組 織

1. 大明神原遺跡調査委員会

岡 田 道 人	上郷町教育委員会委員長
関 島 昌 平	同 教育長
北 原 忠 夫	同 委 員
小 室 伊 作	同 委 員
矢 崎 和 子	同 委 員
小木曾 英 寿	上郷町文化財保護委員会委員長
牧 野 光 彌	同 副委員長
麦 島 正 吉	同 委 員
稲 垣 隆	同 委 員
菊 本 正 義	同 委 員

2. 調 査 団

団 長 佐 藤 甦 信	日本考古学協会会員
調査団 牧 内 住 子	長野県考古学会会員

3. 指 導

長野県教育委員会事務局文化課

4. 事 務 局

関 島 昌 平 (教育長)	、	篠 田 公 平 (教育委員会事務局長)
北 原 克 司 (産業課長)	、	吉 川 勝 一 (社会教育主事・係長)
中 園 紘 (耕地係長)	、	吉 川 文 男 (産業課・耕地係)

5. 発掘作業従事者

関 島 安 雄, 島 岡 吉 次, 後 藤 好 男, 菊 本 正 義
橋 爪 忠 吉, 吉 川 紀 美 子, 北 原 弘 子, 福 島 明 夫
松 下 真 幸, 大 島 利 夫, 吉 川 正 美, 井 上 和 男

6. 遺物整理・製図等

佐 藤 い な ゑ, 田 口 さ な ゑ

お　　わ　　り　　に

上郷町の土地改良総合基盤整備事業の農地の土地基盤を整備し経営の近代化により農業振興を図ることに計画されて昭和59年度調査に入りました。この地区内には重要な遺跡があるとされているため、工事に先立って発掘調査を実施したものであります。周辺には早くから表層面より、土器・石器が散見されていたこともあり、注目されていたところであり、発掘調査の必要が生じた次第であります。

今年が初年度であり、一部分を行いました。調査に当たっては、何時もお世話をいただいている考古学者の佐藤甞信先生を団長に調査員・作業員の御努力と関係者の御協力により予定どおり発掘作業を終え今日まで佐藤先生の献身的な御努力により報告書の刊行に至りました。発掘及び遺物等の整理に当たられた皆様、調査に関係し、御指導と御努力を賜りました皆様方に本誌上から御礼申し上げます。

本誌に収めてあります遺物を大切に記録保存すると共に、次年度の本格調査予定個所に期待をいたします。今回同様に計画が順調に行われますことを心からおねがい申上げる次第であります。

昭和60年3月

上郷町教育委員会

黒 田 大 明 神 原

1985・5

発 行 長野県下伊那郡上郷町教育委員会

印 刷 株式会社 秀 文 社
